雜錄

神秘主義の爲に

故岡本春彥

「私の生涯は姓を改める毎に不幸を新にする」――岡本君は生前しばしば此言葉を口にした。

彼は明治廿七年一月一日、愛知縣海西郡平島村なる野村家の次男として生れたのであるが、彼が五歲の時遭遇した父の死は、彼の生涯を大いなる不幸に導く第一歩であつた。其年彼れの母は三人の兒を携へて實家なる同郡彌富町の横井家に寄食し、春彥君は慈悲深い祖父母の手許から滿五歲にして小學校へ通ふ事となつたが、この小學を卒業するや、三母は殘れる二人の兒を養育せんが爲に、三重縣桑名郡七取村字香取なる立勝寺住職鯖瀨秀曉氏の許に再緣し、春彥君は十二歲の春富田なる三重縣立第二中學に入つた。

幼くして父を失ひ他人の間に育つた彼は、單に金錢の爲に、あらゆる迫害、あらゆる凰辱をも甘んじて受けざるを得なかつたのであると痛感し、こゝに先づ金を得る最上手段として醫學により身を立て、以て家運を挽回せんと幼な心にも悲壯なる決心を爲すに至つた。これ實に彼が中學二三年の交の事であつたといふ。明治四十三年三月首席を以て同中學を出で、其年七月第一高等學校第三部へ無試驗入學を許可された。多年田舍にあつて夢想してゐた一高生活の實現は、暫くの間彼に無上の幸福を與へてゐた。當時十七歲の可憐なる一少年は、自分が全校中の最年少者であるとい矜誇や何かで自分も大に得意として、むやみに寮歌を聲高く歌つて大道を濶步したといふ事である。然しここに居る事須臾にして忽ち彼は所謂一高生活なるものに惟焉たらざるを得なくなつた。これより先、彼の第二の家が寺であるといふ事、彼の母方の祖父母が共に熱心なる佛敎歸依者である事などは、彼をして大分此方面の書籍等にも親しましめてゐたのであるが、一高に於ける友人並に此頃彼が愛讀した哲學書の强烈甚大なる影響は彼を根底より動かしてつひに最初の志望を全然放棄せしむるに至つた。此時代の彼の愛讀書はショウペンハウエルの「意志と現識としての世界」、並びにニイッチェの「ツアラトウストラ」等であつたといふ。かくして彼は一高三部一年級の學年試驗の準備を整へたまゝ飄然として京都に赴き第三高等學校第一部乙類へ入學手續を一切淸ました。

三高三年間の生活は彼が後年常に感謝の念を以て憶起し且つ語つた所である。彼はそこにあつて、ますます自己を深め自己の道を明に見出してゆくと共に、一方には長服し信頼するに足る幾人かの友を得たのであつた。彼の時間の大半は教室よりもむしろ圖書館に於て過された。彼は常に哲學と文藝との間に來往し、異常なる精力を以て此方面の書籍を渉獵した。大正三年七月首席を以て三高に業を卒ふるや、彼は新秋都門に入るの日を夢想し、英氣を發ふの傍ら、洛陽三ケ年の塵勞を洗はんが爲に八月郷里伊勢から海づたひに南海放浪の旅に出で、紀南の湯崎温泉に遊び、そこで彼の未來の妻たるべき人であつた大阪の谷岡本ひな子孃とはじめて相見え、其父岡本重威氏の厚き知遇を蒙るに至つた。これから以後の彼の生活は、全く不可抗なる力にみちた渇望と狂嵐との中にあつてのものがきである。新涼九月、一度は東京大學の哲學科に籍を置いて見たものゝ、留る事僅か一個月にして彼は再び京都の人となりその地の大學に哲學を專攻する事となつた。大學に於ける三年間、彼の心靈と肉體とは Liebe und Werke の梓木にかけられて、思ふ存分苛まれたのである。此世に於て會ふ可らざる人が遭つたといふ悲劇から生ずるあらゆる苦しみと悲しみとは一瞬間と雖も彼が安靜の境に在る事をゆるさなかつた。おのれの意志を實現し、自ら最も意義ありと確信せる生活を送らんが爲めに、若い彼は雄々しくも赤手空拳を以て頑迷回陋なる「舊思想」、「舊時代」と闘ひ、棄つ可らざるものをも棄て、去る可らざるものをも去つた。恐ろしい力を以て動もすれば分裂せんとする自我を統一しながら、死物狂になつて彼は、醜惡陰險なる現實に對して眞正面から突進した。かうした嵐の狂へる中にあつて、彼は數多の詩を書き歌を詠み、「ブルノー研究」を物し、卒業論文「シェルリングの象徴思想」をも完成するに至つたのである。三個年の心勞つひに空しからずして、彼は大正六年七月優秀なる成績を以て京大哲學科を終へると同時に大阪なる岡本家の人となつたのではあるが、これより先き、其年の春の初め、養父なるべき人の唐突なる死は岡本家の上にもまた既に暗い影を落してゐた。彼が未來に措いたすべての夢ははや消へはてあらゆる計畫悉く畫餅に歸してゐた。さればあの類稀なる炎熱だつた昨年の夏と雖も、彼は新婚の夢を暖むる暇もなく、京に大阪に、パンを得る爲の道を探さざるを得なかつたのである。越えて九月眞宗中學に職を得て英語を教ふる事となつたけれども、一週二十乃至二十一時間の激務は、多年の疲勞後、殊に生來あまり強健でない彼にとつてはかなり堪え難い所であつた。「仕事を、仕事を」と自らの爲の勉強をしきりに氣づかひ焦り乍らも、彼はまづ人間としての道に生きざるを得ざる事を悲んだ。蒼臘の末、寒冒に羅つたと信じて病牀に臥したのがはじまりで、本年一月六日夜東山醫院に入り、腸チブスと診斷され、十八日朝來病急に革り遂に翌十九日午後三時半溘然として、然し極めて安らかに永遠の眠に就いた。享年二十有五、實は滿二十四歳十九日といふ極めて短い生涯である。まことに彼の一生は全く天才と逆境との最も殘酷な爭闘史であつた。(矢野禾積識)

次の一小篇は岡本君が昨年十一月の「文章世界」誌上に現はれた福士幸次郎氏の「神秘主義の決定」なる一文を讀んで感ずるところあり筆を執つたもので、吾々が知る限りに於ては これが君の絶筆

てあるから、不取敢こゝに掲載して君の思想上の面影を偲ぶよすがとする。もゝ某新聞紙への寄書として書かれたものであるから、君の研究的の方面は之に依て知ることは出來ないが、併し君の思想の一般傾向は其中に明かに表はれて居ると思ふ。君の勞作中最研究的で且つ最纒まつたものは「シェリングの象徴思想」であると思ふが、其一部は近きうちに本誌上に發表さるゝ機會があらう。

（編輯員識）

一

神祕とは火の樣な生命の體驗そのものである。其れは言葉の靄でも無ければ、觀念を包む出來合の法衣でも無い。眞の「神祕」は何よりも「朦朧を忌む」ものである。其の事は夙にシマンズもハネカーもマーテルリンクも共に早く力說した處である。然るに日本の所謂神祕派なる詩人中には底淺き感動、平俗薄弱なる觀念に朦朧縹緲たる綾絹を着せて、實は言說せんとすればなり得る價少き瓦石をさも尊きもの深遠なるもの不可言のものなるかの如くに賣捌いてゐる者がある。されば寧ろ單に朦朧派とか技巧派とか稱した方が彼等の商賣に應はしい、斯くの如き僞神祕派の橫行に對して、福士氏が近來力を罩めて攻擊の烽火を揚げたのは私の竊に多としてゐた處である。

然るに今月の文章世界に掲げられた氏の「神祕主義の決定」なる一文を讀むに及んで氏が上述の如き僞神祕派を攻擊するに滿足せず、前世紀末には恐ろしい洪水の樣に流行したが既に今日に於ては勢力と地盤とを相當に失ひつゝある實證的な立脚地を固持して神祕主義を一般に驅逐せんとするものなる事を知り私は痛く驚かざるを得なかつた。そして其れは詩壇延いては一般文壇に取つて恐ろしい害毒ある企だと思つた。惡しき芽は其の延びざるひまに拔取れ。これ卑才ながら此一文を草せんとした心である。されば此處に辯解せんとする神祕主義は露風氏柳虹氏のそれではなく、哲學上に於てはプロティンの古よりスコッス・エリゥゲナ、エックハルト、ベーメを經てシェルリング、

ラベイソン、ベルグソンへと傳結され、文學上に於ては歐米に於ける往昔の浪曼派及近代象徴派中の或人々によつて唱導せられたそれの事である。（但し、固より從來の其等が如何なる點に於ても其儘完璧だと云ふのでは決してない。こゝに論ぜんとするものはたゞその根本精神根本態度のみに就いてである。）

先づ福士氏は言ふ、「吾々は信ずる前に疑はねばならない。若し之れを終局までも疑はねばならないものだつたら、終局まで其れを通すがよい」と。而かも其れより僅か數行下に於て「2＋2＝4 之れでよいではないか」と言つて之れを受入れないものは「受けべきもの」を受けないものであり、「至當と公平を缺いて」ゐるものであり、「事實の認識に對して我儘である」ものだとなし、數學的認識や科學的認識を然か輕卒に受入れ得ない神祕主義者をわけもなく難じ去らんとしてゐる。これは何と云ふ亂暴にして大ざつぱな前後矛盾した論述であらうか。

かつてデカートは Cogito, ergo sum. と言つて眞に批判的な近代哲學の鼻祖となつた。そして其れは信ずる前にあらゆるものを（從つて數學的科學的認識をも）疑つてぎりぎりの處迄押しつめた後何は疑ひ得ても疑ふと言ふ活動だけはどうしても否定し得ぬと言ふ覺醒に達して始めて得られた偉大なる思想であつた。それは2＋2＝4と言ふ如き認識や因果律と言ふ假定の上に立つ科學的認識や比量智などを其儘不可疑のものとして承認し得る如き幼稚にして單純な中途半端な抽象的な處から出立する思想家の思もよらぬ發見であつた。そしてそれは其後カント、フィヒテ、シェルリング、ヘーゲルと繼承され、現代に於ては獨逸の新カント學派の人々によつて種々の改正を受け色々の異つた姿の下に提唱されてゐる思想である。そして

2+2=4と言ふ數學的認識や自然科學の依立する範疇が如何にして可能なりやと言ふ問題こそは、カント始め現代哲學（單に獨逸のみならず英佛に於ける哲學）の大半が喧しく論爭してゐる重大問題なのである。それにも拘らずこの批判哲學以後の現代に於て之等を然か容易に沒批判的に承認すべきものとして論じ去らんとする人のある事は何と云ふ意外な事であらう。かゝる人こそ現代の煩悶を理解しない前世紀末の遺物として見做されても仕方あるまい。かゝる徒は福士氏の所謂思想の「精密」「確實」「明瞭」を得る事に對しては潔く斷念すべき思想上の貧民に屬すべき輩であらう。其れは信ずる前に嚴密に疑惑し批判し得る能力を缺く者だからである。そしてかゝる人は科學や數學を壓制にも其儘受入れよと强辯する事によつて却つて其等の根據の疑はしい事相對的な事を痛感せしめる者である。凡てのものを疑つて疑ひ得ぬ處迄登りつめて此點より再數學や科學の認識の依つて可能なる根據を飜へり見る者にして始めて眞に數學や科學の限界並に其の牢固たる確實性を感得し得る。そして數學や科學の眞の擁護者はかゝる人にのみ求むべきであつて、福士氏の如き盲目的崇拜家は却つて最負の引倒しをする人である。かくて結局福士氏の言は矛盾幼稚沒批判にして非現代的不確實不精密の譏を免れる事は出來ないであらう。從つてかゝる言を以て神祕主義の堅壘を崩し得やうなどとは思ひもよらぬ事である。

二

然らば神祕とは何であるか。それは如何に疑はむとしても疑ひ得ぬ最直接で純粹な絕對者——卽フィヒテの事（ダートハンドルンジ）行の如きものそのものである。「我は我なり」と云ふ活動とか思惟活動の相卽（イデンティテート）とか意識の統一とか純粹經驗とか直接經驗とか稱せられるものが卽之れである。見る者と見られる者

とが等しく主觀と客觀とが等しい活動、自分の中に自分を寫し全體と部分、可能と實在、意義と存在との相卽せられる活動、ベルグソンの所謂デュレーの如きものがそれである。人は苟も物を言へば必や何等か其背景にかくの如き自覺活動、思惟の統一活動を豫想してゐる。懷疑家と雖之を承認しなければ自殺するより外ない。疑ふ事その事さへも此を否定しては不可能だからである。故に最根本的で純粹で直接で具體的なものは獨りこの自覺活動あるのみで、其他のものは疑ひうるものであり、從つてより抽象的な不純物である。(普通考へられてゐる樣に自然科學や心理學の考へる如き感覺世界や精神界は決して具體的なものでも純粹なものでも直接なものでもない。それは幾多の抽象や限定や主觀的加工が加へられて始めて得られた不純物だからである。)

若しかくの如きものが眞の絕對者であり最正確にして純粹なものであるとすれば、それは矛盾した對立者の綜合であり融一であるが故に之を神祕と稱するに何の不都合があらう。眞の神祕とはかく對立したものを融一する活動を稱する名稱であつて、催眠術や遠距離人心感應や千里眼の如き現象を指示するものではない。そして眞の神祕主義と云ふものは福士氏の言ふ如くに「科學で立證の出來ない事實が世上にある」が故に成立したものではなく、寧ろ科學的智識の確實な事に對する驚嘆より生れたものである。

されば若し絕對者がかくの如く神祕的なるものならば此絕對者の眞の體驗の表現たる藝術が神祕的でなくてもよいと言ふ理由がどこにあらう。抑々自覺活動が無限である事は今更言ふ迄も無いが故に、そこに種々の自覺活動が生じ色々の世界種々の物象が生ずる。空間時間の世界も數學の世界も科學の世界も肉欲の世界も道德の世界も皆此

自覺活動が或程度迄表現され凝結したものに過ぎない。なぜなれば最純粹絕對なものとしては此の唯一無限の自覺活動の外何も存在しないからである。然し數學科學の認識や所謂論理的智識は凡て見るものと見られるものとが異なれる認識であり對立者の內面的綜合を可能ならしむる認識では決してない。此れも固よりかの自覺の絕對活動の發現の一段階ではあるが、それは自覺活動が完全な自覺活動として眞に己の本性に歸つて表はれ出た上級の段階に屬するものではない。然るに藝術宗敎哲學の世界は斯くの如き見るものと見られるものとが眞に內面的に融一する活動を現出する世界であり、そして其點に數學や科學の認識に超絕した價値を有するのである。されば數學や科學の認識は神祕的な絕對者の活動の或下級段階に於ける表現であるから此數學や科學の認識を以て絕對者を測量せんとする者あらば、其人は自分の雇つた下僕に却つて使はれる事を許す人であらう。

次に所謂言語なるものも其の言ひ表はすものと言ひ表はされるものとが直に內面的に融一してはゐない活動である。そこには殆科學の世界を支配すると等しい比量智が勢を得てゐる。等しく自覺活動の一の表れではあるが、未だ下級低次な段階の產物である。されば藝術家が之を使用する時そこに一種の無理が生ずる。そこで「光り輝く闇」と言ふ樣な文字さへ用ゐられる。然し批評家ラフアエルがセザンヌの描の一點一線が所謂三次元的な空間上に於ける普通の一點一線とは異つた其れ自身に於ける絕對の意味を持つた表現であると言つた樣に、詩人の用ゐる言語は其中によりや所謂言語的論理的に曖昧不理があつてもノルドウの樣に强ちに之れを批難する事は出來ない。それは外形は同じでも所謂普通の言葉としてそこに用ゐられてゐるのではないからである。藝術に於ける線

や色や音や言葉を普通のそれらの法則を以て批判せんとするの人は同じ青色をしてゐるからと言つて海の法則を以て山を測らんとする人である。然しかく言ふは其表現がいかなる意味に於ても曖昧であつてよいと言ふのでは決してない。否それはかの自覺活動としての絶對者が最正確であり最具體的な直接純粹明瞭な經驗である樣に、かゝる活動の體驗の表現たる藝術の表現は徹頭徹尾正確明瞭なる事を要する。それは單に普通の論理的智識に取つて曖昧な計りであつてかゝる絶對活動の體驗者、卽ち根本的全心の覺醒者に取つては最明瞭正確に把捉され得る事、かのブレークやバーンスやヴェルレーヌやヴェルハーレンなどの或詩に見る如きものでなければならぬ。そして此論の初頭に述べた僞神祕派の誤謬も、又福士氏が神祕主義の朦朧性を强ちに攻擊するのもそれぞれ此の機微なる點を淺薄に理解した事に原因するのである。

又恍惚とか、又それに似たる心境に就いても(姑くシェルリングの如き福士氏の嫌ひな獨逸人は之を除くにしても)プロティンやブルノーやスピノーザやベルグソンやなどが如何に深刻に之を說いてゐるか、そしてそれは氏の言ふ如き心理學的の淺薄な抽象的なものとは如何に異つてゐるかをもう少し懇に研究してほしいと思ふ。そして以上の如き論述が一見甚抽象的に見え乍ら最具體的な純粹な考へ方である事をも見逃がされない事を希望する。なぜなれば論理的智識や感覺界よりもそれらを成立せしめてゐる根據の力がより具體的であり、それらは既に上にも述べた樣に、又ヘーゲルも言つた樣に既に抽象分析固定化に墮したものであつて、眞の具體的直接的なものはベルグソンの言ふ樣なデュレーの如きものだからである。終りに福士氏が從來の神祕主義が徒に幻夢の扉中に隱れて現代の悲喜の中へ深く穿ち入らなかつたのを

攻めたのは正しいと思ふ。そしてこの點及對立の融合を力說する眞の神祕主義は餘りに唯心的にのみ傾き過ぎてはならないのにいつしか其の傾向を生じたこと、且つ其表現がいかなる意味に於ても朦朧となり勝ちとなつた事は象徵派が衰頽して生命派などが現出した主因を作つてゐると言へやう。然し從來の神祕主義にかゝる缺點はあるにしても其爲にそれの有する第一義的の根底は如上よりして到底覆されうるものではあるまいと私は信ずる。そして歐洲象徵派の此缺點を補ひ日本に於ける從來の淺薄な僞神祕主義より足を洗つて深刻な新らしい象徵派新らしい神祕主義がもう一度近い中に起つて來る事を私は祈つてゐる一人である事を附加したい。（完）